

## 医療的ケア児の教育を支える学校看護師のやりがい

北村 千章<sup>1) 2)</sup>・室 亜衣<sup>1) 2)</sup>・千野 由麻<sup>2) 3)</sup>・大内 あや子<sup>2) 3)</sup>  
西條 竜也<sup>4)</sup>・海谷 静花<sup>2)</sup>・林 伸彦<sup>2)</sup>

### 要旨

**目的：**本研究の目的は医療的ケア児の教育を支えている学校看護師の医療的ケア児・保護者・教職員との関わりの中で感じるやりがいを明らかにすることである。

**対象と方法：**医療的ケア児の看護に携わる学校看護師 11 名を対象に、半構造化面接を実施し、質的帰納的に分析した。

**結果：**分析の結果、15 サブカテゴリー、6 カテゴリーに分類された。学校看護師は、【子どもが学校で安全に過ごすために必要な存在である】と自己の役割を認識し、【子どもが教育を受けることを支えている】、【子どもが医療的ケアを自ら行えるようになるために子どもの成長を支えている】ことへやりがいを感じていた。また、【子どもから学びながら信頼関係を構築している】、【医療的ケア以外にも子どもと関係づくりができる】、【教職員や保護者に支えられている】と子どもや保護者、教職員との関係性の中でやりがいを感じていた。

**考察：**学校看護師が自己の役割や存在意義を認識することができるよう、医療的ケア児を地域で支えている小児看護の専門家と連携し学校看護師を支援できるような体制を構築する必要性が示唆された。

キーワード：学校看護師，やりがい，医療的ケア児，教育

## The sense of satisfaction felt by school nurses who support the education of children with medical complexity

Kitamura Chiaki<sup>1)2)</sup>, Muro Ai<sup>1)2)</sup>, Chino Yuma<sup>2)3)</sup>, Ouchi Ayako<sup>2)3)</sup>,  
Nishijyo Tatsuya<sup>4)</sup>, Kaiya Shizuka<sup>2)</sup>, Hayashi Nobuhiko<sup>2)</sup>

### Abstract

**Aim:** This study aims to elucidate the sense of satisfaction felt by school nurses who support the education of children with medical complexity, in their interactions with the children, the children's caregivers and their teachers.

**Participants and method:** 11 school nurses who are involved with the nursing care of children with medical complexity participated in this study. Semi-structured interviews were conducted with the participants to collect data on their thoughts and perspectives of supporting the education of children with medical complexity. Qualitative descriptive analysis of the data was conducted.

**Results:** As a result of the analysis, data were categorized into 15 subcategories and 6 categories. The following categories of thought aided the sense of satisfaction felt by school nurses: "Supporting the education of children"; "Supporting the children's growth in terms of their ability to look after themselves medically". The category "Thinking of yourself as being necessary in terms of allowing children to lead a safe life at school" confirmed the sense of duty felt by participants. The school nurses also felt a sense of satisfaction in the following categories: "Building a sense of trust with the children while learning from them"; "Being supported by the children's caregivers and school teachers".

**Discussion:** This study points to the importance of both building a network that can support school nurses, and collaborating with pediatric nursing specialists who are supporting children with medical complexity in the community so that school nurses can fully recognize and appreciate the significant role they play.

Key words : school nurse, thoughts, children with medical complexity, education

1) 清泉女学院大学看護学部

2) NPO 法人親子の未来を支える会

3) 清泉女学院大学大学院看護学研究科修士課程

4) 飯山赤十字病院

## I. はじめに

近年、学校で人工呼吸器や喀痰吸引、経管栄養等の医療的ケアを必要とする児（以下「医療的ケア児」）の増加（厚生労働省，2020）に伴い、教育現場で医療的ケアを行う学校看護師に対するニーズが高まっている（文部科学省，2019 a）。医療的ケア児にとって、学校で医療的ケアを受けられることは、授業の継続性の確保や登校日数の増加による教育機会の確保・充実につながる（文部科学省，2019 b）。学校看護師は、教職員と連携しながら、医療的ケア児の教育を支えていく役割がある。

しかし、先行研究では、教育職や保護者との認識の違い（田中ら，2018）や連携の難しさ、雇用問題、医療職としての責任の重さ、緊急時の対応への不安（山本，2018）を要因とした学校看護師の離職が報告されている（清水，2018）。

一方で、10年以上勤務している学校看護師も存在する。清水（2018）は、離職意思を抱いた学校看護師が仕事を継続しようと気持ちを変化させた理由として、やりがいや必要とされていると感じることを報告した。医療的ケア児との関わりの中で、学校看護師としてのやりがいを感じることは、離職の予防へつながると考えられる。

そこで本研究は、医療的ケア児・保護者・教職員との関わりの中で感じる、学校看護師のやりがいを明らかにすることを目的とする。学校看護師のやりがいが明らかになることで、離職予防を含めた学校看護師への支援の示唆を得るとともに、医療的ケア児を継続的に支えていくことへの一助となると考える。

## II. 研究目的

医療的ケア児の教育を支えている学校看護師が医療的ケア児・保護者・教職員との関わりの中で感じるやりがいを明らかにする。

## III. 用語の定義

大辞泉によると、やりがいとは「そのことをするだけの価値と、それにもなう気持ちの張り」と

されている。また、看護の分野においては、「自分が行ったケアや、そのケアによる患者の反応から感じる目的を成し遂げたという満足感や充実感、またそれらを通して感じる自己の成長に対する喜びなどの感情を表すもの」（柴原ら，2019），「看護体験から得られる充実感や達成感」（尾上，2012）と定義されている。そこで、本研究における学校看護師の「やりがい」とは、「医療的ケア児・保護者・教職員との関わりの中で感じる学校看護師の存在意義や充実感」と定義した。

## IV. 研究方法

### 1. 対象者

対象者は、A県とB県の医療的ケア児が通学する、公立小学校および特別支援学校に所属する学校看護師とした。

### 2. 調査期間

2019年9月～2019年12月

### 3. データ収集方法

A県・B県の医療的ケア児が通学する公立小学校および特別支援学校5校にて、学校長からの研究協力への承諾を得た後、対象者に該当する協力者の紹介を得た。その後、参加への意思がある学校看護師へ、書面と口頭にて研究概要を説明し、同意を得た。

同意を得た対象者に、インタビューガイドを用いて、半構造化面接を行った。インタビューガイドの主な内容は、①学校看護師として働いて感じる役割や喜びについて、②医療的ケア児のケアや日頃の関わりで感じること、③保護者や教職員との関わりの中で感じることである。面接内容は、承諾を得てICレコーダーに録音した。

### 4. 分析方法

録音したインタビュー内容を NVivo 12 Plus for Windows を用い逐語録を作成し、研究者が録音内容と逐語録の整合性を図った。逐語録の内容から、「やりがい」について焦点をあて、意味内容を保持しながら文脈を抽出し、質的帰納的に分析した。分析の過程では、生成された内容を研究

者間で精査し、意見の一致が得られるまで検討を重ね、信用性の確保に努めた。また、分析の過程では、質的研究に精通した研究者からスーパーバイズを受けた。

## 5. 倫理的配慮

本研究は、清泉女学院大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 2019K001）。対象者には書面と口頭にて、研究の主旨、調査方法、参加の自由意思等を説明し、不参加や協力の撤回によって不利益は一切発生しないことを説明した。また、個人情報保護、データの守秘、成果発表時の匿名性の確保について説明した。面接の場所は、対象者の都合に合わせて調整し、個室等のプライバシーが確保できる環境で行った。

## 6. 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

## V. 結果

### 1. 研究対象者の概要（表 1）

対象者は 11 名で、年代は 30 歳代から 60 歳代であった。看護師経験年数は、5 年以上 10 年未満が 2 名、10 年以上 20 年未満が 6 名、20 年以上 30 年未満が 2 名、30 年以上が 1 名であった。学校看護師の経験年数は、1 年未満が 2 名、1 年以上 3 年未満が 4 名、3 年以上 5 年未満が 3 名、5 年以上が 2 名であった。

表 1 研究対象者の概要

対象者	対象者の年代	看護師経験年数	学校看護師経験年数
A	40 歳代	15 年	5 年
B	50 歳代	20 年	2 年
C	30 歳代	6 年	5 ヶ月
D	30 歳代	17 年	2 年
E	50 歳代	30 年	2 年半
F	60 歳代	25 年	3 ヶ月
G	40 歳代	15 年	5 年
H	30 歳代	17 年	2 年
I	40 歳代	15 年	4 年
J	30 歳代	9 年	3 年
K	40 歳代	13 年	4 年

### 2. 学校看護師が医療的ケア児・保護者・教職員との関わりにおいて感じるやりがい（表 2）

分析の結果、57 コードを抽出し、15 サブカテ

ゴリー、6 カテゴリーに分類された。以下の記述では、コード化したものを〈〉、サブカテゴリー化したものを『』、カテゴリー化したものを【】で示す。

カテゴリーは【子どもが医療的ケアを自ら行えるようになるために子どもの成長を支えている】、【子どもから学びながら信頼関係を構築している】、【子どもが教育を受けることを支えている】、【子どもが学校で安全に過ごすために必要な存在だと思う】、【医療的ケア以外にも子どもと関係づくりができる】、【教職員や保護者に支えてもらっている】であった。

#### 1) 【子どもが医療的ケアを自ら行えるようになるために子どもの成長を支えている】

学校看護師は、〈子どもの成長を日々実感している〉ことで〈子どもの成長と一緒に喜ぶことに、やりがいを感じる〉ため、『子どもの成長に関わることが嬉しい』と、教育現場の中で、学校看護師も子どもの成長を支える一員であることに充実感を抱いていた。そして、子どもの成長を実感し『子どもから元気をもらう』ことで、学校看護師の原動力につながっていた。また、学校看護師は〈自己導尿など子どもが手技を習得したときにやりがいを感じる〉、〈自己管理の日々の指導により、子どもができるようになる時に成長を感じる〉ように、医療的ケア児の将来を見据え、自立できるように関わり子どもが医療的ケアを自ら行えるようになったとき『子どもがセルフケア力を獲得できることが嬉しい』と、学校看護師としてのやりがいを得ていた。

#### 2) 【子どもから学びながら信頼関係を構築している】

学校看護師は、〈子どもの打算のない笑顔が心に響く〉や〈楽しそうな子どもの姿を見られることが嬉しい〉と、医療的ケア児と関わる中で、『子どもの笑顔を見られることが嬉しい』と感じていた。また、医療的ケア児は〈言葉が通じなくても表情から癒され、救われる〉ことや、〈子ど

表2 学校看護師が医療的ケア児・保護者・教職員との関わりにおいて感じるやりがい

カテゴリー	サブカテゴリー	コード (57)
子どもが医療的ケアを 自ら行えるようになる ために子どもの成長を 支えている	子どもから元気を もらう	子どもからパワーをもらっている (1) 子どもの成長が見えるので元気がもらえる (1)
	子どもの成長に 関わることが 嬉しい	子どもの成長を日々実感している (1) 学校という場所は、子どもが成長する場であると思う (1) 子どもの成長と一緒に喜べることに、やりがいを感じる (1) 子どもが学校でできることが増えていく姿を見るのが嬉しい (1) 子どもが学校で成長していく姿を見ることに、やりがいを感じる (1) 子どもは学校生活のなかで成長している (1) 子どもが成長する過程と一緒に過ごせるのが嬉しい (1) 子どもが次のステップに進むときに特に嬉しく思う (1)
	子どもがセルフケ ア力を獲得でき ることが嬉しい	自己導尿など子どもが手技を習得したときにやりがいを感じる (1) 子どもが手技を覚えると嬉しい (1) 子どもが自己の体調管理や知識を身につけた時が嬉しい (1) 自己管理の日々の指導により、子どもができるようになる時に成長を感じる (1) 自己管理ができるという成長が見える時にやりがいを感じる (1)
	子どもの笑顔を見られることが 嬉しい	子どもの打算のない笑顔が心に響く (1) 楽しそうな子どもの姿を見られるのが嬉しい (1) 話せなくても子どもの笑顔や身振り、表情から気づけることがある (1) 子どもの笑顔が見られると嬉しい (1)
子どもから学びながら 信頼関係を構築 している	素直で可愛い 子どもだから 仕事を続けること ができている	日々、子どもに癒されている (1) 言葉が通じなくても表情から癒され、救われる (1) 子どもが可愛いので続けられている (1) 子どもたちが可愛くて素直で、関わるのが楽しい (1) 子どもとの触れ合いが楽しい (1)
	子どものケアに 関わりながら 学ぶことが多い	子どものケアを通して勉強になったり元気をもらえる (1) 今までの看護師の人生で学ばなかったことを、今学んでいる (1) 一緒にいさせてもらえることに感謝している (1)
	子どもとの関係性 をつくること が大切である	子どもの心や体の成長が関係性の中で育まれる (1) 子どもに、受け入れてもらっていると実感できる (1) 子どもとの信頼関係があるからケアができる (1) ケアの回数が増え、関係が良好になっていく (1) 子どもにとって身近な存在になりたい (1)
子どもが教育を受ける ことを支えている	子どもの教育を 支えるという 役割がある	看護支援ではなく、勉強できる環境を整える (1) 子どもには最大限授業は受けさせてあげたいと思う (1) 障がいがあっても学校で勉強できるように配慮できる (1) 子どもたちが学校に通えるために、必要な仕事だと思っている (1) 子どもが毎日登校できるようにするのも、学校看護師の役割だと思う (1) 子どもが授業や校外学習に参加できるように体調面をフォローすることが、看護師の役割だと思う (1) 看護師のサポートによって子どもの経験が広がる (1)
	地域で暮らす 子どもと保護者を 支えている	地域で生活する子どもの支えとなっている (1) 学校の活動に参加できることが母の安心につながる (1)
子どもが学校で安全に 過ごすために必要な 存在である	保護者の代わりに 医療的ケアを 行っている	保護者の代わりに私たちがケアを行っている (1) 学校で保護者の代わりに医療的ケアの支援をすることが、学校看護師の役割だと思う (1)
	子どもが安全に 学校で過ごせる ように支援する	ケアを安全に行い、体調を整えるのが仕事だと思う (1) 安全に教育が受けられるように、私たちが支援している (1) 安心・安全に教育を受けられるようにするのが一番大切である (1) 学校で医療的ケア児が体調よく過ごせれば良いと思う (1)
医療的ケア以外にも 子どもと関係づくりが できる	病院とは違う 関わりができる	病院での看護とは違い新鮮な気持ちになる (1) 病院と違い、学校での支援は子どもとの関わりが親密になる (1)
	医療的ケアの介入 だけではない 関わりを持てる	自分が相手に尽くしたいという気持ちが子どもに通じる (1) 医療的ケアをする時間以外にも色々な場面で子ども達とコミュニケーションをとっている (1)
教職員や保護者に支え てもらっている	働きやすい環境で 仕事ができている	代替の看護師がいて、仕事も休みやすいため、良い環境で働いている (1)
	教職員や保護者との 関係づくりが大 切だと感じる	大変だと思う時もあるが、みんなからいろいろ教えてもらい、自分のためにも良いと思う (1) 教師と看護師を同等に見てくれて、大事にされていると感じる (1) 先生との関わり方を覚えて面白みややりがいを感じ始める (1) 先生や母から看護師が関わったことで子どもに良い変化があったことを伝えられる (1) 保護者との関係も良好で、良い環境で働いていると思う (1)

括弧内の数字は各コード数を示す



もが可愛いので続けられている>と『素直で可愛い子どもだから仕事を続けることができている』と感じ、子どもの可愛さが学校看護師を続けていく原動力となっていた。さらに、学校看護師は、<子どものケアを通して勉強になったり元気をもらえる>、<今までの看護師の人生で学ばなかったことを、今学んでいる>ことから、『子どものケアに関わりながら学ぶことが多い』と感じ、医療現場では学ぶことができなかつた看護を修得していた。

そして、子どもから学びながら、信頼関係構築の重要性を感じていた。<子どもとの信頼関係があるからケアができる>、<子どもに、受け入れてもらっていると実感できる>と、医療的ケア児のケアを通して『子どもとの関係性を作ることが大切である』と認識していた。

### 3) 【子どもが教育を受けることを支えている】

学校看護師は<看護支援ではなく、勉強できる環境を整える>ことで、医療的ケアを要する子どもが毎日登校できるようにするのも、学校看護師の役割だと思う>と、教育現場での看護というのは『子どもの教育を支えるという役割がある』と、学校看護師特有の役割を認識していた。また、学校看護師の存在が<地域で生活する子どもの支えとなっている>ことや、<学校の活動に参加できることが母の安心につながる>と感じ、医療的ケアを要する『地域で暮らす子どもと保護者を支えている』役割があると認識していた。教育現場の役割だけではなく、地域で暮らす子どもや家族を包括的に支えている学校看護師の役割にやりがいを抱いていた。

### 4) 【子どもが学校で安全に過ごすために必要な存在だと思う】

学校看護師は、<学校で保護者の代わりに医療的ケアの支援をすることが、学校看護師の役割だと思う>ように、学校で『保護者の代わりに医療的ケアを行っている』役割があると認識していた。また、<ケアを安全に行い、体調を整えるの

が仕事だと思う>や<安全に教育が受けられるように、私たちが支援している>のように、医療的ケアの実施だけではなく、『子どもが安全に学校で過ごせるように支援する』という、学校現場における医療者としての役割があると認識していた。

### 5) 【医療的ケア以外にも子どもと関係づくりができる】

学校看護師は<病院と違い、学校での支援は子どもとの関わりが親密になる>と感じ、<病院での看護とは違い新鮮な気持ちになる>ことは、『病院とは違う関わりができる』と捉えていた。医療現場とは異なる教育現場で看護を提供することや、病院とは異なる子どもとの関係性の構築ができることを、肯定的に捉えていた。また、<医療的ケアをする時間以外にも色々な場面で子ども達とコミュニケーションをとっている>ように、『医療的ケアの介入だけではない関わりを持てる』ことに、教育現場で学校看護師として働く魅力を感じていた。

### 6) 【教職員や保護者に支えてもらっている】

学校看護師は<代替の看護師がいて、仕事も休みやすいため、良い環境で働いている>と話すように『働きやすい環境で仕事ができている』と感じていた。また、<教師と看護師を同等に見てくれて、大事にされていると感じる>や、<保護者との関係も良好で、良い環境で働いていると思う>ように自身が周囲の関係者から大切にされている体験から『教職員や保護者との関係づくりが大切だと感じる』と認識していた。

## VI. 考察

医療的ケア児の教育を受ける機会を保障するためには、学校で医療的ケアを担う学校看護師が必要不可欠である。今回語られた、やりがいの内容から、学校看護師の役割認識の重要性と教職員と保護者、同職種とのネットワーク構築の必要性について考察した。

### 1. 学校看護師のやりがいを支える役割認識

学校看護師は、医療的ケア児自身に成長発達の

変化が見えたとき【子どもが医療的ケアを自ら行えるようになるために子どもの成長を支えている】と感じ、学校看護師の存在意義や仕事への充実感を抱いていた。学校看護師は、高度なケアや技術といった看護のスキルが必要であるとともに、子どもが将来過ごすべき生活像についても見通せる力が必要になる（古株ら，2014）。小児看護において重要であるセルフケア獲得や発達段階などの個別性に合わせた支援が『子どもの成長に関わることが嬉しい』というやりがいにつながっていると推察された。学校看護師の小児看護に必要な知識や技術を向上していくことが重要であると考ええる。

また、学校看護師は、【子どもが学校で安全に過ごすために必要な存在である】や【子どもが教育を受けることを支えている】という役割を認識していた。古株ら（2014）は、学校という場で、どう看護を捉えて看護師の役割を果たしていけるのかをイメージできれば、勤務当初の期待と現実のギャップからの回復に留まらず、アイデンティティの揺らぎからの回復に向けて導いていけると述べている。学校看護師の役割を認識することは、教育現場における病院との看護の違い、看護師の役割の不明確さ、教職員との連携困難による混乱などの学校看護師が抱く揺らぎから回復することにつながると考えられた。さらに、学校看護師が抱く揺らぎから回復し、働き続けることは、継続した安全な医療的ケアの提供や医療的ケア児や保護者、教職員の安心感につながると考える。

学校看護師の離職防止に向けて、医療的ケア児を地域で支えている小児看護の専門家と連携し、学校における小児看護の知識や技術、役割を周知していく必要性が示唆された。

## 2. 教職員や保護者、同職種とのネットワーク構築の必要性

学校看護師が離職意思を抱いた理由として、教職員との連携の困難さが半数を占めている（清水，2018）。また、学校看護師は少人数配置であり、

孤立しやすい立場にあるため、連携の難しさなどの悩みを解決できる場も少ない。

しかし、本研究では【教職員や保護者に支えてもらっている】と、＜教師と看護師を同等に見てくれて、大事にされていると感じる＞ことや、＜先生や母から看護師が関わったことで子どもに良い変化があったことを伝えられる＞ことで、学校看護師の働きをフィードバックしてくれる環境や、＜みんなから色々教えてもらい、自分のためにもいいと思う＞と教職員と連携できていることが、学校看護師としてのやりがいにつながっていた。先行研究の結果からも、教職員との連携が円滑である方が職務満足度が高いこと（古株ら，2012）が報告されており、キーパーソンとなり得る教職員や保護者との関係性が、学校看護師のやりがいを左右することが考えられた。さらに、松澤ら（2014）は、「個別性のある子どもを理解し、安全で質の高いケアを実施するためには子どもの包括的な情報を得ている教職員との円滑な連携は必要不可欠である」と述べている。医療的ケア児の教育を支えていくためには、教職員や保護者とチームとして連携していく必要があり、円滑な連携のためには、それぞれの専門性や役割を理解し、尊重し合うことが重要である。

また、学校看護師は他校との情報交換を行うことで、自身の不安や葛藤を同じ環境で働く学校看護師たちと共有し、解決することを望んでおり（松澤ら，2014）、学校看護師が医療的ケア児の教育を支えるチームの一人として、専門性を活かしていくためには、同職種と情報共有・交換できるような場が必要である。

以上のことから、学校看護師や教職員、保護者とのネットワークの構築により、同職種間でのピアサポートや意見交換・情報共有、それぞれの立場の理解を促進することができ、教職員や保護者との円滑な連携につながると考える。

## Ⅶ. 結論

1. 学校看護師は、【子どもが医療的ケアを自ら

行えるようになるために必要な存在だと思う】ことや、【子どもが学校で安全に過ごすために必要な存在だと思う】ことに自己の存在意義を見い出していた。また、医療的ケア児にとって、学校看護師は、学校に通学するために必要不可欠な存在であることから、【子どもが教育を受けることを支えている】という役割を認識していた。そして、学校看護師の役割を遂行し、子どもの教育を支えていく中で、【子どもから学びながら信頼関係を構築している】ことや、【医療的ケア以外にも子どもと関係づくりができる】と医療現場とは異なる子どもとの関係性の構築に、やりがいを感じていた。

2. 学校看護師は、【教職員や保護者に支えられている】と、働きやすい環境で教職員や保護者と連携できていることが、学校看護師としてのやりがいにつながっていた。教職員や保護者と円滑に連携するためには、学校看護師や教職員、保護者が互いの専門性や役割を理解できるような、ネットワーク構築の必要性が示唆された。

## Ⅷ. 研究の限界

本研究は、2 県に限定した学校看護師のやりがいについての結果であり、雇用形態などが研究結果に影響を及ぼしている可能性も考えられ、一般化するには限界がある。

## Ⅸ. 謝辞

本研究にご協力いただきました学校看護師の皆さま、研究を承諾していただいた学校長殿に心より感謝申し上げます。

本研究は、平成 31 年度赤い羽根福祉基金による助成を受けて実施しています。

## Ⅹ. 引用文献

古株ひろみ, 泊祐子, 竹村淳子, 他(2012). 医療的ケアを担う特別支援学校に勤務する看護師の多職種および保護者との連携と仕事満足との関連. 人間看護学研究, 10, 59-65.

古株ひろみ, 津島ひろ江, 泊祐子(2014). 特別支援学校で働く看護師が看護のアイデンティティを回

復するプロセス. 小児保健研究, 73(2), 284-289.

厚生労働省(2020). 医療的ケア児等の支援に係る施策の動向第 17 回医療計画の見直し等に関する検討会. <https://www.mhlw.go.jp/content/10800000/000584473.pdf>, 2020 年 12 月 18 日.

松澤明美, 咩野聡子(2014). 特別支援学校において勤務する看護師のストレス要因. 小児保健研究, 73(6), 874-879.

文部科学省(2019 a). 学校における医療的ケアの実施に関する検討会議最終まとめ. [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/22/1413967-002.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/_icsFiles/afieldfile/2019/03/22/1413967-002.pdf), 2020 年 12 月 27 日.

文部科学省(2019 b). 令和元年度学校における医療的ケアに関する看護師研修会 【行政説明】学校における医療的ケアの現状と学校に勤務する看護師の役割について. [https://www.mext.go.jp/content/20200610-mxt\\_tokubetu02-000007673\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200610-mxt_tokubetu02-000007673_01.pdf), 2023 年 1 月 19 日.

尾上美喜恵(2012). 看護実践のやりがい感に影響する要因分析—平均在院日数が短い病棟での看護体験を通して—. 日本看護学会論文集, 看護管理/日本看護協会 編, 42, 276-279.

柴原加奈, 中西貴美子(2019). 病棟から外来に異動した看護師が『やりがい』を得るプロセス. 三重県立看護大学紀要, 23, 33-44.

清水史恵(2018). 特別支援学校で医療的ケアに関わる学校看護師の離職予防対策の検討. 木村看護教育振興財団看護研究集録, 25, 132-159.

田中千絵, 猪狩恵美子(2018). 特別支援学校における医療的ケア実施体制の課題—学校看護師の意識を中心に—. 福岡女学院大学大学院紀要発達教育学, 5, 59-66.

山本裕子(2018). 特別支援学校で働く看護師の業務および関係職種との協働に関する認識. 小児保健研究, 77(2), 184-191.